



昨年三月十一日、私達の住む大槌町を含む広い範囲で大地震と大津波が発生し、多くの尊い命がうばわれました。

地震の時、たまたま町で友達と遊んでいた私は近くの避難場所に逃げましたが、家に居た祖父母は流されました。私も、もしも遊びに出ていなかったら流されていたと思います。この体験を通して、誰がいつ突然いなくなってもおかしくないと感じました。これからは一日一日、時を大切に過ごしていきたいです。

三月十一日の地しんのとき、ものすごくゆれが強くて、長くて、おどろきました。

体育館で家族がむかえに来るのを待っていると、お母さんがむかえに来ました。家の様子が気になって、家にもどりました。

家にもどるとちゅう、ふみきりのところまで津波が来ていて、あわてて引き返そうとしました。でも、間に合わないと思い、ぼくとお母さんは、車を置いて田んぼの方へ走りまわりました。ふり返ると、津波が近づいてきていて、びっくりしました。田んぼの所に、鉄のがっちりとした台があり、そこに急いでとび乗りました。

その直後、津波が車やがれきなどいっしょにおし寄せてきました。だけど、ぼくたちが乗った鉄の台はとてものがんじょうで、津波が来ても流されませんでした。ぼくとお母さんは、

「がんばろう。」

と、何度もはげまし合いました。

だんだん寒くなってきて、雨まじりの雪がちらついてきました。辺りも暗くなり、このままここにいたら寒いからと、お母さんが波につかりながら、近くのビニールハウスに穴を開けました。でも、ビニールハウスの中もおなかのあたりまで水が入っていて、中に入っても体を温めることはできそうにありませんでした。

仕方なく、また、台の上で水が引くのを待っていました。

その間、上空をヘリコプターが何回も飛びハンカチをふって助けを求めましたが、全然気付いてくれなくて、何度もがっかりしました。

周りからは、

「助けて。」

と言う声が聞こえ、ぼくもお母さんと大声で助けを求めました。このままここで朝までいたら、ごごえてしまうと、とても不安でした。

三時間ほどして、ぼくはビニールハウスのとなりに民家を見つけました。水も引いてきたので、おなかのところまで水につかりながら歩き、その家にたどり着きました。

その家は、少し高いところに建っていたので、津波は来ていませんでした。

「こんばんは。」

と、声をかけても、その家の人にはひなんして、だれもいませんでした。お母さんが、「だれもないけれど、このまま外にいたら寒くて朝まで体力がもたないから、げんかん先にいさせてもらおう。」

と言いました。そして、げんかんに入ったら、とてもあたたかくてほっとしました。その間に、何度もよしんがあったけれど、その家は新しく、あまりゆれることはありませんでした。

ぼくたちは水につかって歩いたので、だんだん体が冷えてきました。お母さんのバッグの中にカイロが一つだけありました。服にはるタイプのカイロで、ぼくの背中の中にはるうとしたけれど、シャツが水でぬれていて、はることはできませんでした。

お母さんが、

「げんかんマットを借りよう。」

と言いました。そして、そのマットを毛布がわりにして、二人の背中にかけて、朝までくるまっていた。それでも、とても寒くて、早く朝になってほしいと思いました。

お母さんのけいたい電話のじゅう電が切れて、時間も分からなくなり、ますます不安になりました。お母さんに、

「最後まであきらめないでがんばろう。」

と、はげまされました。**\*44行目**

やがて、だんだんと外が明るくなり、北の方から人の声が聞こえてきました。声のする方を見ると、車がたくさん止まっているのが見えました。ぼくたちは、この家の人にお礼の手紙を書いて、そこまで歩いて行くことにしました。

でも、昨日までの景色とは全然ちがっていて、どこを歩いていいのか分かりませんでした。ぼくは、早く人がいるところに行きたくて、水の中を、転びそうになりながら、一生けん命に歩きました。

お母さんに、

「寒くて何も食べていないのに、あきらめないでがんばったね。」

と、何度も言われました。

人がいるところに着くと、ぼくが入っている野球のスポーツ少年団のかんとくに会いました。とてもうれしくなりました。

ぼくたちは、かんとくの友達の家まで車で送ってってもらいました。おふろに入らせてもらい、ラーメンを食べさせてもらいました。昨日の夜から何も食べていなかったので、すごくおいしかったです。

その後、ひなん所に連れて行ってもらいました。学校の体育館には、大勢の人がいて、おどろきました。

その日から、体育館での生活が始まりました。

電気もつかず、水も出なくて、生活は一変しました。今までの生活が、とてもありがたいと感じました。今までは、食べたいときは好きなものを食べることができたけれど、ひなん所では、おにぎり一個が貴重な食料でした。

ぼくは、一か月ほどひなん所にいました。そこでは、みんなが協力して生活をしなければなりません。ぼくは、家を失って落ちこんでいましたが、ひなん所の人たちとっしょに生活しているうちに、だんだんがんばろうという気持ちになりました。

その後、仮設住宅に入ることができ、落ち着いた生活にもどることができました。

しん災から五か月がたちました。様々なことを体験し、これからは、どんなにつらいことがあっても、あきらめないでがんばれると思います。そして、困っている人を助けたり人の役に立ったりできるよう、がんばりたいと思います。

(指導 南條 一敏)